

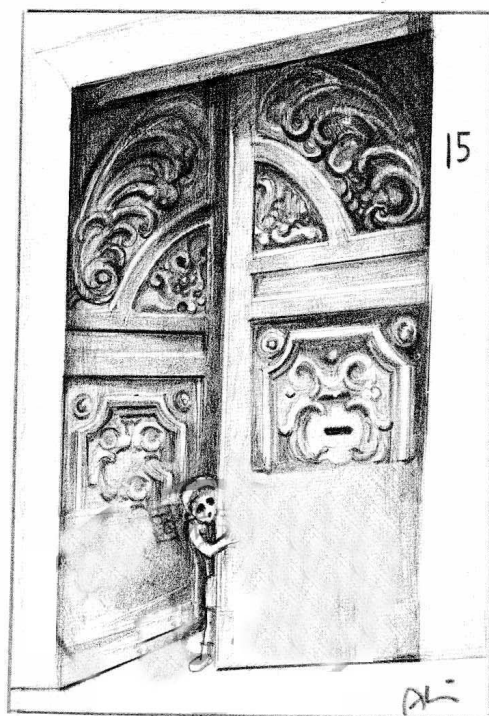
その夏の別れ

和田 俊



その夏の別れ

和田 俊



筑摩書房

和田 俊(わだ・たかし)

一九三六年、中国・広州市生まれ。一九五九年東京大学法学部卒。朝日新聞社入社。ブノンペン支局長、パリ支局長を歴任し、一九八三年、ヨーロッパ総局長となる。一九九二年から、ニュースステーション(TV朝日系)解説者を務めた。現在は朝日新聞社顧問。主な著書に『クメールの微笑』『パリの四角い空』『欧州知識人との対話』などがある。

その夏の別れ

一九九六年七月十日 第一刷発行
一九九六年九月十五日 第三刷発行

著 者 和田 俊

発行者 柏原成光

印刷 厚徳社

製 本 積信堂

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三
振替〇〇一六〇―八一四一二三

ご注文・お問い合わせ、乱丁・落丁本の交換は左記宛へ。
〒三一大宮市櫛引町二六四 筑摩書房サービスセンター
TEL 〇四六―六二〇〇五

その夏の別れ
目次

序章 悲しみの彼方

7

第一章 わが死せむ美しき日

26

第二章 運命の影 I — がんとの共存

48

第三章 運命の影 II — ただ結びつけさえすれば

72

第四章 日々の輝き

95

第五章 茜色の空 パリの空

120

第六章 メコンの落日

135

第七章 時の移ろい パリ再び

162

第八章 ハムステッド・ガーデン・サバール

191

終章 永劫えいごうの回帰

215

あとがき

236

その夏の別れ

装画 和田亞紀

序 章 悲しみの彼方

十二月も末の冬の日であった。クリスマスをと数日後にひかえ、ロンドンの繁華街の店々の窓には聖書の物語が思い思いに飾られ、柔らかな照明を受けて、祝祭の輝きをあたりいつぱいに振りまいていた。

パル・マル通りからリージェント通りに向かってしばらく散歩したあと、私は地下鉄に乘ろうと、ピカデリー・サーカス駅においていった。長いエスカレーターが地中に下っていく。隣りには逆に、地上に向かうエスカレーターが動いていて、たくさんの人が乗っている。金髪の若い女性、白髪の初老の紳士、額にしわを刻んだ老女、インド人の青年、中国系の娘、アフリカの女性、実にさまざまな人達を通り過ぎてゆく。

その時突然私は、奇妙な感覚に捕らえられた。私は隣りのエスカレーターに立つ人たちを自然に目で追っていたのだが、その中に一人として死者がいらないという事実に気づき、いかにも不思議

議に思えたのである。

いつもなら何の疑問も起こらぬ事柄が、どうしても納得できない。それは目の前の現実が、額縁に入って急に静止してしまったような、空白の感じであった。

この地上には、生きている人しかいない。亡くなった人たちは、みんなどこに行ってしまったのか。いつせいに消えてしまったのか。いや、そんなことはあるまい。

あの金髪の女性にも、インド人の青年にも、すでに死んでしまった親しい人がいたはずである。にもかかわらず、いまここにいるのは、生き残った人たちばかりだ。これはきつと偶然の現象に違いない。いなくなった人たちは、彼らの背後のどこかに身を隠している。目の前のエスカレーターに並ぶ生者の列は、おそらくは洞窟の壁に映る幻影に過ぎないのではあるまいか。

そんな思いが浮かんでは消え、私には眼前のすべてが、現実から遠く離れた、幻灯のように見えたのである。

その時、生者と死者が突然目の前で入れ替わっても、私はなんの不思議も感じなかったに違いない。その奇妙な感覚はもちろん、一瞬のものにすぎなかったけれども、私の胸に鮮やかな影を残した。

私たちの家族はこのロンドンで数年を過ごし、街角にさまざまな思い出が染みついている。だから、きつかけさえあれば、時間は現在から過去へ、そしてまた過去から現在へと、自由に飛翔するように思えた。

私は友人に会うため、ピカデリー・サーカスから地下鉄に乗って、ラムズ・コンデュイット通りのレストランに向かった。大英博物館にほど近く、本屋から雑貨屋まで、小さな商店が軒をつなぐ通りである。そこに着くまでは、すっかり忘れていたのだが、この通りには外国人登録の事務所がある。

あれは一九八三年の夏であった。私と妻亜紀は二人の子どもを連れて、外人登録のためにここをやってきた。ロンドンに到着して間もないころで、とても蒸し暑い日だったことを思い出した。まだ、町の地理がよく呑み込めなかったから、ラムズ・コンデュイット通りがどのあたりにあるのかも、よく分からなかった。事務所で長く待たされたこともあり、小学生の子どもたちは、すっかりお腹をすかしてしまった。さて、どうやって宿に帰ったものか。私はラムズ・コンデュイット通りから、広いシオボルズ通りに出て、タクシーを探した。妻は下の子どもの手をひいて、遠くを見るように、街角にたたずんでいた。

帽子をかぶった妻の姿が、いま鮮やかに見える。私は彼女に声をかける。

「これでひと仕事済んだね。じゃ、そろそろ行こうか、亜紀」

「そうね。行きましょう」

本当ならここで、あの声がかえってくるはずであった。

だが、いま言葉は冬空に消え去る。街角に佇んでいるのは、私ひとりだけで、まわりには誰もいない。呼びかけの向こうから渡ってくるものは、ただ茫々たる時間の木霊である。

見上げると、空は灰色で、辺りには雪が舞っていた。冷たい風が枯れ葉を運んで、通りを吹き抜けていく。時計をみると、友だちとの約束の時間に近い。急がねばならぬ。私はそう気づいて、外套の襟をたてた。

妻亜紀は一九九三年七月二十八日、東京杉並の自宅で永眠した。享年五十歳。病気は甲状腺がんの骨転移であった。

その夏は雨の多い、冷たい夏であった。七月に入っても、暑さが少しもおりてこず、薄暗い曇天の日が続いた。窓から望む風景は灰色で、青空は思い出したように、ほんの時折りのぞくだけであった。

「いつまでも鬱陶しいわね。本当の夏がくるまで、あと何日かしら。夏休みには、みんなでまた旅行がしたいわね」

病床にあった妻は、痛む首筋をかばいながら、そんなことを言い言い、窓外の桜の古木に目をやっていた。冷夏とはいえ、さすがに木々の葉先きは濃い緑色に染まっている。飛び交う小鳥たちの声を追って、家の飼い猫たちが窓辺に集まり、裏の雑木林の梢をじっと見上げている。妻は

生き物の自然の息づかいに、静かに耳を傾けているかにみえた。

それは妻亜紀の人生の最後の時間であった。もう治療の方法のないことを覚悟して、私は亜紀を病院から自宅に連れ戻したのであった。そうして、それから五日の間、私はずっと彼女のベッドの脇に付き添い、消えてゆく妻の命を見つめていた。

妻は七月八日に、首の骨を移植する難しい手術を受けた。これまで六度も入退院を繰り返してきた彼女は、その度に辛い治療に耐え、医師も驚くほどの気力を取り戻した。

「こんども上手くいくに違いない」

私はそう信じて疑わなかった。人間の持つ自然の治癒力に、私はひたすらの信頼を置いていたのかもしれない。

「これで手術は終わりだ。こんどこそ打ち止めだ」

私はそんなことをいって、妻を手術室に送り出した。

「大丈夫よ」

いつもそうするように、彼女もささやくような微笑みを浮かべていった。この日手術の予定は午後一時半だったのだが、急に一時早くなったのだという。

「家に電話してもらったのだけど、もう出かけたのか、連絡できなくて……」

私が病院に着いたときには、妻はもう白い手術着に着替えていた。もし私が時間に間に合わなかったらどうしようかと、とても不安だったに違いない。私の顔をみると、いかにもほっとしたような、またちよつと困ったような複雑な表情をみせた。

それでも、病室から手術室に向かう間に、胸のなかの決断がついたのであろう。まるで近くの店に買い物にでもいくような、気軽な目元に戻っていた。こちらに心配をかけたくないという、はたに対する気配りが人一倍強くはたらく性格であった。

「私は大丈夫よ」

よくそういったが、あるいはいつも、まわりの不安を和らげようとしていたのかも知れないと思う。

私もまた、そのとき懸命に平静さを装ったのであったが、容体は手術後、私たちの願いを裏切つて、いちどきに悪化していった。

妻亜紀は東京芸大の油絵科を出た画家であつた。山口薫教室で学び、主題にはシュールレアリズムの趣きをもつ幻影的なものを選ぶことが多かったように思う。また、最近では画布に黙示録的なものが、次第に滲み出てきているようにも感じられた。最後の作品に自分でつけた題名のかなには、『予兆』『思いがけないこと』『その向こう』『帰りみち』など、とりようによつては、運

命の囁きかと思わせるようなものも散見した。

もつとも、彼女自身に尋ねたなら、「そんなことないよ。ただ思いつきで、つけただけよ」と、笑って答えるに違いない。体調のよいときの彼女は、精神も潑刺として、まったく病人にはみえなかった。しかし、身体の中にあるがんの影が、彼女の心にさまざまな黙示を呼び起こしていたことは想像できる。

亜紀は九三年の六月末に、東京・銀座のサエグサ画廊で個展を開くことに決めていた。前年の秋から暮れにかけては、身体の調子もかなり良く、個展への意欲も高まっていた。「これならがんとこの平和共存も、うまくいくかも知れない」と、私も心に明るさを持ったものだ。

しかし、その年の明けるころから、すこしずつ妻の調子がくずれてきた。首のまわりの違和感が、だんだん強くなってきたようであった。

がんセンターでのエックス線撮影の結果、第三頸骨がずれて、頸椎に歪みがでているので、このまま放置しておいては危険だとの診断が出た。頸椎の固定手術を受けたほうがよいかもしれないというのが、がんセンター整形外科の判断であった。そして、首の手術では日本で最高の権威といわれる九段坂病院の山浦先生を紹介された。

そのしばらく前のこと、妻を車に乗せてがんセンターへ検診に向かう途中、歩行者をさけるため、とっさに急ブレーキをかけたことがあった。あつという妻の小さな叫びが、しまったという後悔の思いとともに、私の頭にずっと焼きついていた。

今度の第三頸骨のずれが、この急ブレーキによるものか、あるいはがん細胞の増殖によるのか。脊髄造影のCTスキャンなど外部からの診断では、原因は正確には読み取ることができない。がんの増殖ではないことを、祈るばかりであった。

頸椎の固定手術は、金属の支えを首に埋め込み、頸骨を補強しようというものである。したがって、術後は首を回すことができなくなる。日常生活の不便は計り知れないものがある。

しかし、手術をうけると決めたあとも、亜紀は明るかった。

「首は今でも半分くらいしか回らないのだから……。隣りの人と話すとき、これからは身体全体を回さなければならぬわけね。あゝ、そうだ。食卓の私の椅子、回転椅子にしよう。それなら、椅子ごと回ればいい。きつと、楽よ」

固定手術そのものは、うまくいった。術後のレントゲン写真をみると、妻の首筋には金属の棒とそれを固定するワイアのようなものが、くつきりと映っていた。

「なんだか、人造人間みたいだね」

亜紀はそんなことをいって、おかしがるのだった。首にかかる頭の重みが、これでかなり軽減されたであろう。患部の痛みがへって、妻は元気を回復した。

手術後五日目、担当医師から「立って歩いてみましょう」といわれると、亜紀は「わあい」と大喜びで立ち上がるのだった。「とにかく、精気が出ている」。そう思うと、私もまた元気が出てくるのであった。